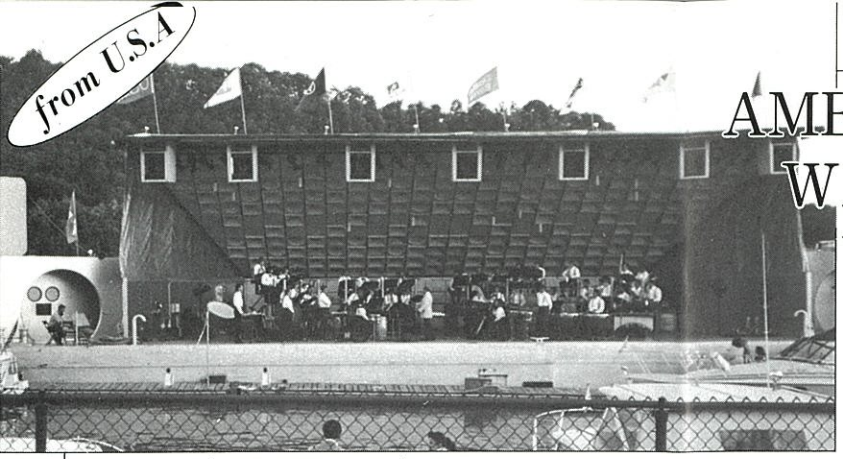
昭和63年11月25日発行

J.P.C

No.41



コンサート風景(船の屋根が開いたところ)

AMERICAN WATERWAY WIND ORCHESTRA に参加して

No.2269 鈴 木 優 子

1988年5月末から約2ヶ月間、私はAmerican Waterways Wind Orchestra(A・W・W・O)の演奏旅行に参加して、ペンシルバニア州を振り出しにオハイオ・ミシシッピ川流域以東を旅してきました。日本人は私一人、それにつたない英語でどうなることかと、期待より大きい不安に包まれた旅の始まりでしたが、始まってみればとにかく見るもの聞くもの全て面白く、こんな人達がこういう土地に住み、こんなことを考えていたのだ等と感心し、また改めて音楽のもつコミュニケーションの力のすばらしさに気付いた実りの多い旅でした。

このA・W・W・OはRobert. A. Boudreauという夢に溢れた音楽家によって、20年以上昔につくられ、アメリカのいろいろな地域（例えばコンサートホールがないような所）であらゆる人々に音楽をという彼の願い通りに、今では豪華なステージを持つ特製の船の上で委嘱した作品を中心に演奏をしている吹奏楽の団体で、演奏旅行のシーズンごとにオーディションを設け、大学生以上の40～50人のメンバーによって演奏をしています。

打楽器は私を含めて6人で、みんな音楽大学か、総合大学の音楽科の学生でした。旅はペンシルバニア州のピッツバーグから始まり、その周辺の街で3週間程演奏したあと、ウエストバージニア州、インディアナ州と川を逆上り、ミシシッピ川に出て（この間、雨が異常に少なかった為、水位が下がり船が進めなくなり演奏をキャンセルしたこともありましたが）ミズーリ州に寄り、そのあと一挙にミシシッピ川を下り海に出て、海沿いのミシシッピ州等で演奏した後、フロリダに船を置き車に楽器を積んで、ジョージア州、ノースキャロライナ州、そして最後にまたペンシルバニア州に戻りました。

合計15ヶ所で演奏しましたが、その間、私達演奏者は各地域でホームスティをし、食事や練習の送り迎えなどその家庭の人にお世話になりました。ホームスティ先は、音楽が好きで余裕のある家庭が多く、家もほとんどプール付きで、豪華な造りの所が多く驚きました。演奏をする船はMr. Boudreauによって造られたもので、船の屋根の部分が大きく開いてステージになるように造られています。川を下って目的の街に着くと屋根を開き、そこで2日程練習をし、夜コンサートを開きます。コンサートはだいたい7時頃から始められ、開演1時間くらい前から近所の人々がいすを持って集まってきます。辺りが暗くなるとステージに照明をつけ、岸からもライトで照らします。専属のPAの人がいて演奏者一人一人にマイクがついているので、セッティングを変える時はマイクによく音が入るように気を遣います。プログラムは、その時々で変えられていきますがコンツェルト、現代的な曲、マーチなどをいろいろ織りまぜ、充実したものにしています。

この旅の間40～50曲音を出しましたが、殆ど委託した作品で、他の団体ではなかなか演奏されていないもののようです。今年も新曲を何曲か演奏しましたが、その中でTZVI AVNIというイスラエルの作曲家がXylophonのコンツェルトを書き、私はソリストとして演奏する機会に恵まれました。どこか東洋的なものを感じさせられる不思議な曲で、とても印象に残っています。他のオリジナルの曲もアフリカの民族音楽から題材をとったものや、現代的な奏法を多く用いる曲などがあり、打楽器も効果的に使われ演奏していて楽しい曲が数多くありました。打楽器のメンバーの中ではTimp.専門とDrs.専門の人がいてあとの4人は、鍵盤や小物、Cym、S・D、など分けあって演奏しました。B・Drumのチューニングや、マーチでのS・Drumの演奏にはとても感心しました。みんなとてものびのびといかにも楽しそうに演奏し、また気さくな人が多くとても楽しく過せました。

吹奏楽の団体といっても編成は少し変わっていて、Fl、Cl、Ob、Fg、各4人(Saxはなし)Hrn、Trp、Trb、各5人(Euph

パーカッションのメンバーと

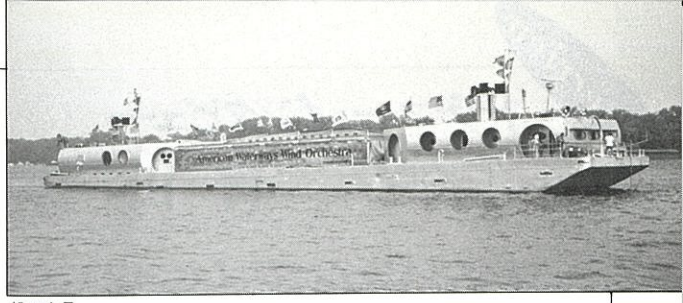
ホームスティ先の人と

左からTzvi Avni氏、筆者、Boudreau 氏

なし)Tuba 2人、Piano、Harp、各1人で、金管に比重が大きくなっています。金管楽器のパワーには最初の練習から圧倒されました。惜しみなく吹き、ハイトーンも果敢に吹きこなしていて豪快です。木管も繊細という感じは余りしませんでしたが、困難な現代曲にも前向きに取り組んでいて感心しました。コンサートは毎日1000人以上の人が集まり、みんな夕食後の一時を楽しみに来たという感じで、拍手も声援もとても伝わってきます。場所によってはコンサート中に花火を打ち上げたり、色とりどりの風船を放したり、演出も凝るので聴衆もますます盛り上がり、何回もアンコールがかかります。一番盛りあがっているのはMr. Boudreauですぐにアンコールを始めてしまったり、気分によって曲目を変えたりするので、その度に私達Per.は大わらわでした。

このようなメインのコンサートの他に、船の中の部屋で行う室内楽中心のコンサートや、日曜日、教会の中でも演奏をしました。この教会でのチャーチ・サービスは、チャベスのトッカータの2楽章をたびたび演奏し、厳粛な雰囲気にとても合っていました。練習もコンサートもない日は、ホームスティ先の家族が買い物に連れていってくれたり、友達と映画に行ったりして楽しみました。ルイジアナ州に行った時には、友達5、6人でニューオリンズに行き本場のジャズを聴いて感激しました。

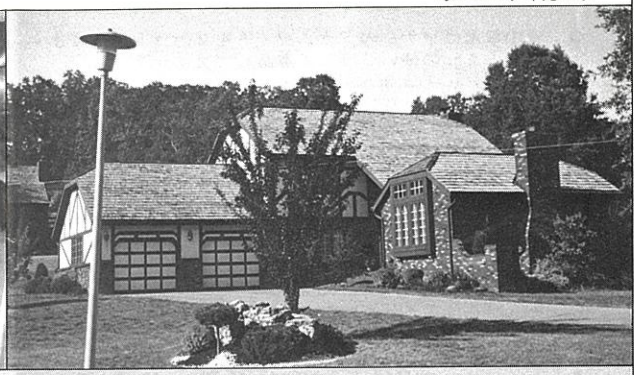
このような旅の中、いろんな土地で様々な人々に出会い、いろんな人の暮らしを見れたこと、アメリカのいい所、悪い所、外国から見た日本など、いろいろな事を考え体験できたこと、一生忘れないだろうと思います。そしてMr. Boudreauの夢は更に大きく広がり来年から3年間はヨーロッパ・アフリカ・ツアーが計画されています。このように夢を大きく拡げて、音楽によっていろんな人々を取り囲んでいく姿を見て、少しでも見習えればと思いました。



船の全景

船の中に陳列されているBoudreau氏所蔵のアートコレクション

ホームスティ先の家



𝄞 コンサート案内 𝄞

♪上野信一打楽器リサイタル

11月26日(土)　午後7時～
石橋メモリアルホール(JR上野駅下車)
¥3,000（全自由席）
☆JPC会員¥2,700
—プログラム—
A、ジョリヴェ：打楽器協奏曲
西村朗：メタロフォニー(世界初演)他

♪日本人によるバリ島の舞踊とガムラン音楽

11月28日(月)　午後7時～
青山円形劇場(地下鉄表参道駅下車)
¥2,000（全自由席）
—出　演—
スカル・ジュプン
スカル・ムラティ
国立音楽大学バリ・ガムラン研究会
—プログラム—
Penyembrama
Kosali Arini　他

♪第7回パーカッションの夕

桐朋学園音楽科打楽器専攻生による
11月29日(火)　午後6時30分～
朝日生命ホール(JR新宿駅下車)
¥1,000（全自由席）
—プログラム—
三善晃：TORSE Ⅴ
S. Fink：PLAISANTERIE
S. Reich：MUSIC FOR PIECES OF WOOD他

♪9th SHOBI PERCUSSION ENSEMBLE

12月1日(木)　午後6時30分～
江東区文化センター(地下鉄東陽町下車)
¥500（全自由席）
—プログラム—
M. UDOW：AFRICAN WELCOME PIECE
T. GAUGER：GAINSBOROUGH　他

♪洗足学園

12月3日(土)　午後6時30分～
前田ホール（洗足学園内）
¥300（全自由席）
—プログラム—
サウンド・オブ・ミュージック
木挽歌　他

♪東京マリンバ・トリオ・リサイタル

12月22日(木)　午後7時～
サントリーホール（小）
¥3,500（全自由席）
☆JPC会員¥3,150
—プログラム—
J.S.バッハ：トッカータとフーガ二短調
G. ガーシュイン：サマータイム　他

Interview

ドラマー・インタビュー

青山　純

昭和32年東京に生まれ、子供の頃からタイコ大好き少年だった青山純氏。スクエア、プリズム等を経て、はにわちゃんに参加したり、現在は山下達郎のドラムを中心にスタジオ、ステージで活躍している。

インタビューに訪ねた所は今や若者の人気を集めている芝浦。芝浦は山田倉庫の上にある「スタジオ・ロフト」。山下達郎のツアー・リハーサルの前にお邪魔してマイクを向けた。この日使っていたセットはタムとフロアタムがソナーライトでBDはソナー・シグネチャー、SDはソナー・ハイライト(本当はブロンズのヒッコロHLD-593を使う予定だったが、リハ直前にある人に取り上げられてしまった)。実はソナーライトの持ち主は山下達郎氏。「これ僕のタイコ。」と言ってセットに近づいて来て「あれ？あのスネア(ブロンズ)どうしたの？」「あれね、持ってかれちゃって今日はこれ(ハイライト)なの。」「えー、あのスネア、すっごく良かったのにー。」「でしょう？ネほら皆好きなんだよ、あの音。」の言葉にひたすら頭を下げる某氏たちだった。

Q：青山さんはソナーのドラムセットを２セット持ってますよね。この２つの使い分けって意識してますか？

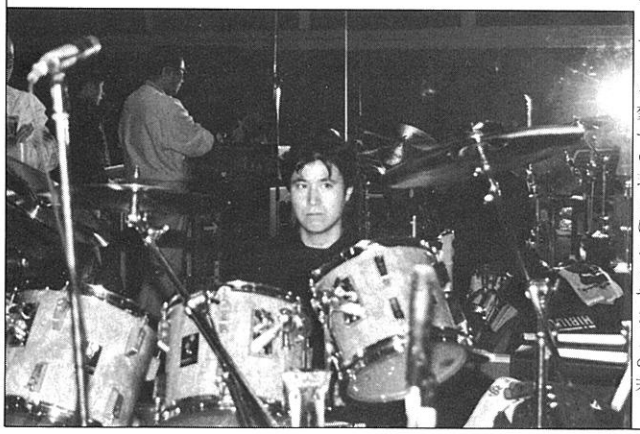
A：シグネチャー(エボニーのヘビー)とフォニックプラス(MS)を持ってるけど使い分けって別にしないんですよね。来月からはあれ使おうって感じで、すぐ飽きちゃうから。悪い意味じゃなくって気分を変えたい、みたいなね。だから音楽的ジャンルによってこれを使うとかあれを使うとかそういうの別に無いんだよね。

Q：ヘッドは主にスムースホワイトを使ってるようですが…。

A：主にでもないですよ。ただあのヘッドは高域の伸びっていうか張りのある音がきれいなんです。テーンともいうし、ドーンともいうし結構好きですよ。…明るい！

Q：シンバルはセイビアンがお好きなようですけど、この前K. Zilのブリリアントのハイハットを買ってましたよね。K. Zilの音、どうですか？

A：セイビアンのHHもそうだけど、K. Zilってわりと買いたての時って音がギラギラしちゃってサ、何か土の中に３年位埋めときたいって思うんだけど(笑)、俺って気が短いから買った時からちゃんとシマリが良くって馴染む音じゃないとだめなんですよ。例えばポンタさんは長い間セイビアンのHHを使ってるから使い込まれて錆もついて相性が良いわけ。でも俺っていつもそこまで我慢できなくって…。で、たまたまK. Zilのブリリアントを見た時に「あー、またこれもギラギラしてんだろうな」って思ったんですよ。でも踏んでみたら結構ね…。ブリリアント仕上げのせいかも知れないけど結構音が落ち着いてるんでびっくりしちゃって、すぐツバつけちゃったって感じ(笑)。意外にうるさくなかったっていうのにびっくりしちゃったってことですかね。



Q：青山さんは左右違う種類のスティックを使ってますね。どういう理由からですか？

A：これは、あんまり真似しない方が良いと思うんですけど(笑)。昔は両方同じで太目のスティック使ってたけど、右がそれじゃ重くなっちゃって少しウエイトの軽いのを持ったらそれでバランスが取れて、で、左手はそのまま残っちゃった感じなんで。—ということは、右手は利き腕だから強いわけでしょ？だから軽いスティックを持っても重さが乗るってことかな。でも当然両方同じ様に叩けなくちゃいけないんだけどね。たまたま僕は今この方法をずっととってるってだけで絶対これが良いってわけじゃないと思う。でも、なんか安心なんです。チップの形も違うけどこれは、左手はどうでも良いとしても右手はシンバルレガートを使ったりするから弱冠気を使ってる程度で、そんなに真剣には考えてないです。振り易さとコントロールのし易い方が大事ですよね。

Q：チューニングに関して気を使ってることは何ですか？

A：バランス。音色、音量のバランス—この、チューニングっていうのが永遠の課題でね。なかなか「こうだ！」ってのが無いんですよこれが。雑誌なんかに出てる『ここととここを締めてこうやればこの音が出ます』なんて叩き手が違えば出る音なんて絶対違うんだから、チューニングはどうしてますか？って聞かれても自分の事は言えても他の人に当てはめたらそうなる訳じゃないし、かと言って、定石みたいなものも軽はずみに言えないし。雑誌に出てるチューニングの方法とか読むと首かしげちゃったりするわけ。えー違うんじゃないの？って。でもそれは好みもあるから僕にははっきり言えないですね。

僕だって暗中模索の状態でね、毎日毎日追求してんです。でもそれが面白いんですけどネ。本当は何も悩まないで、セットの前に座って叩いて「オッ！バッチリだ！」っていうのを望んでんですけど。生ドラムは響きがあるでしょ。場所が変れば音も変るし、結局戦いになっちゃうんですよね。チューニングは難しいです、ホントに……。

Q：青山さんはあまりクリニックをしないようですが、何か理由でもあるんですか？　この前ある楽器店主催のクリニックをやりましたね。その時の青山さんが受けた印象（参加者に対する）ってどうでした？

A：印象——そうねェ……。他の人のクリニックって見たこと無いけど、だいたいプロのクリニックって、何かばーっとやって、じゃソロやりまーす、とか、こういうパターンがありまーすとか言ってただ見せつけるだけっていうのが多いでしょ。基礎的なことは教えるんだろうけど結局はドラムの〝華〟の部分ばっかり見せるようなものでしょ。で、聴きに来てる若い人達もそれを見たいし知りたいし、どうやってんのかな

って、そういうのばっかりほじくりたがるけど僕はそういうの絶対やらないから。ドラムに座らせて、簡単なロックビートやらせて、「何だおまえ、ロクに叩けないじゃないか。これが叩けなきゃ何やってもダメだよ」みたいに根底から崩しちゃうから……。でもこの前のクリニックの生徒さんはそういうの解ってくれてた。話をして納得してくれた。

昔やった時、「青山さん最後にソロやって下さい。」って言われて「ウルセエ、何しに来てんだよっ！」(笑)なんて思った。だからヤなんですよね、クリニックやるのって。

Q：セットとベースっていうのは切っても切れないものだと思うんですけど、山下達郎さんのツアーではベースは伊藤広規さんですね。彼とリズムの作り方とか何か打ち合せのようなものはしてるんですか？

A：打ち合わせ…。昔、若い頃は合宿行って入念にやってたんですけど、最近はオジサンになって来たっていうか(笑)そこまではしてないですね。あの人とは何て言うか阿吽の呼吸ってところもあるけど、お互い全然合わないところもあるんですよ。この２人が何かやると独特な感じになるっていうのがありますね。ベースとドラムが非常にぴったりして一体になってるっていうよりも、２人が重ったうえに別なものがプラスαされて、２人で一体プラスα^2でありたいと思いますね。２人とも仲は良いけどすごく合ってるとは思わないです。

Q：スタジオの話ですが、レコーディングの時譜面をもらうと、その譜面っていうのは大体ラフですよね。そんな時は自由にプレイするんですか？

A：譜面がきっちり書いてあってその通りまずやってみるって面白い。そうすると、アレンジャーが考えたドラムのパターンが解って「だっせーなー(笑)、普通じゃないよなー」なんて思って自分でどんどん変えちゃったりするわけ。反対に何も書いてなくて、コード進行くらいしかないのは最初っから音楽を作る楽しみってのがあるから「こんな感じで、おまかせでやって下さいよ」って言われると嬉しくなっちゃう。びっしり書いてあっても「ここ、こうやってもいい？」なんて言って作っちゃうからどっちにしろ好きにやってんだけど(笑)。

Q：音を録る時、ベースやドラムを最初に音入れしてわりと流れ作業的に作り上げられて行きますよね。このあたり何か思うところありますか？

A：そういう話になるとエライ長くなっちゃうよね、日本の音楽の体質は一なんて(笑)。

レコーディングプロセスに於いてドラムとベースっていうのが最初に入らなくちゃならないってのは勿論そうなんだけれども、例えば人間のドラムとベースを呼んで、まわりに何も無くて譜面があって「これやってくれ」って言われたって、これは音楽的には何も無い。できないわけですよね、音楽というものが。他の人のプレイも聴けないし歌も無かったりして手が出ないわけですよ。そういうのってブータレちゃいますョ。「メンツが後で来るから先々どうなるかわかんないけど多分こうなると思うから、青山さんこういう感じでやって」って言われても何も無いと生身の人間には対処が難しいですよね。まぁそう頻繁にあるわけじゃないけど。でも逆に最終段階までシンセベースと、デジタルドラムが入ってて最後に人間に差し換えるって場合は天国なんですよ。まわり全部の絵面がわかってやるのとわかってないのとじゃエライ違いなんですよ。どっちが良いかっていえば、我々プレイヤーは最後に差し換えてもらえばその方が曲が把握できて良いんだけど。それと最初にセーノでやる時にある程度完成に近い感じで曲を聴けてドンカマと一緒にやるなら全然問題はないけどね。

基本的な合奏の楽しみっていうのを度外視したところでレコーディングがどんどん進んでるっていうか。機械が発達しちゃって、音を録った後に機械で何とかするっていう変な作業がどんどん増えちゃってる。

Q：リズムから重ねて行くレコーディングの場合、完成した音楽は必ず聴けるんですか？

A：殆んど聴けます。必ずとは言えないですね。

Q：すると良い時は良いけれど、こうすれば良かったと思ったそのままを世間の人達が聴いてしまうわけですよね。その辺はどうですか？

A：音色云々が気に入らないとかいうのは最底ですね。録られてる音は良かったけど自分のプレイが気に入らない場合は悔しいですね、すごく。自分のせいですからね、やっぱり。それから良いプレイはしてんだけどエンジニアの録る音がひどくって、レコーディングの時からこの音じゃないんだけどなぁ一とか色々言っても、時間が無いからこっちが引き下がるしかないわけでしょう？で、出来たの聴いたら案の定、だめだってなるともうクサっちゃいますよね。セッションなんて音楽が作り上げられてく途中で製品化されてしまうっていうか…。バンドやソロのレコーディングは自分の納得のいくまでやるでしょ？でもスタジオワークだとスタジオの限られた時間の中で譜面を消化しつつ自分の持ち味を出してちょっと花も咲かせて、なんて大変ですよね。時間がいっぱいあれば良いってモンじゃないけど、時々曲やアレンジに対して理解する時間が少なすぎちゃって、後で何だそうだったのかって思うことがあったりして…。色々あるわけですョ、これが。

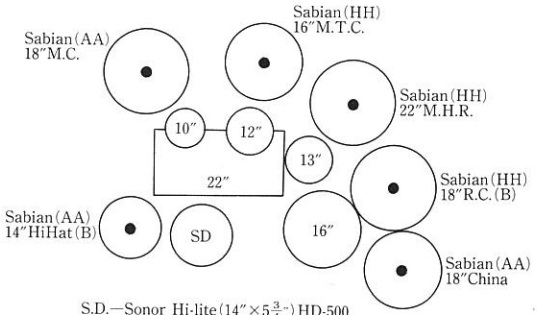
Q：プレイする方は別としても製作側は完全なビジネスとして考えちゃってるんですね。

A：そうそうそうそう。だからスタジオミュージシャンって才能の切り売りしてるようなもんですよね。製作側がその曲に対して僕らほど情熱があるのかどうかわかんないってのもあるし。アレンジ聴いて「あっ、この曲良いんじゃないですか？」って彼らは言うけど、僕達はその曲を一生懸命愛してやろうって思うのにね。そこにギャップがあったりするんですよ。良い音で良い曲を演奏できると良いですね。曲が悪いと落ち込んじゃって「どうやってもダメだ。譜面通りやろ」なんて(笑)なっちゃうわけですよ。でも、僕達はちゃんとやらないと次からは仕事来ないしね…。

なかなか質問が鋭いですね(笑)。

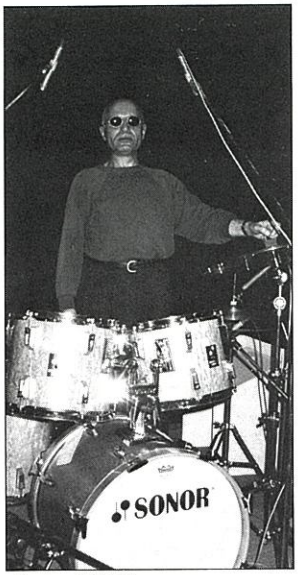
(by T Ichii edit. M. Ishii)

〈11月5日芝浦「ロフト」でのセッティング〉



S.D.—Sonor Hi-lite(14″×5$\frac{3}{4}$″)HD-500
T.T.—Sonorlite
F.T.—Sonorlite
B.D.—Sonor Signature(EB)

Drumcity 情報　＝2つのHOT CONCERT情報＝



ポール・モチアン

I．ジョルジュ・グルンツ・コンサート・ジャズ、バンド

ツワ者ぞろいのビッグバンド、ジョルジュ・グルンツ・コンサート・ジャズ・バンドがヨーロッパより来日した。直前になってドラムがジェリー・ブラウンからポール・モチアンにチェンジ。ピーター・アースキンが某雑誌で〝みんなにもっと聴いてほしいドラマー〟と言っていたその人なんですよ！そのピーター・アースキンの言う通り、彼は言わゆるテクニックタイプではなく、いぶし銀タイプの人。実際、ソロをフューチャーしていたが、さして凄いとは思わなかった、逆にホーンセクションの方が強力。それもそのはず、彼らの経歴を見るとクインシー・ジョーンズ、デュークエリントン、ギル・エバンス、カーラ・ブレイ等ひとくせ、ふたくせあるメンバーばかり。オープニングからアルトのクリス・ハンターのバリバリのソロをフューチャー、続いてトロンボーンのレイ・アンダーソンのご機嫌なラップミュージック、トランペットのマービン・スタムのティンバレスソロと強力な連中ばかり。おまけにアレンジがこれまたこりにこっておもしろい。久々にビックバンドを聞いて感激しましたハイ！なんたってクリス・ハンターが最高でした！

10月21日、九段会館

II．ザ・ガッドギャングライヴ

去る6月に来日して大好評だったS・ガッド率いるガッドギャングが再来日。御機嫌なR&Bを聴かせてくれた。オープニングはもち某CFでオンエアされたあの曲でスタート。前半はショートソロをはさんで体に染み入るアフタービートを要に、リズムでグイグイ押してくるタイトなサウンド。後半は、いきなりステージ中央にスネア、右側にティパレス、コンガをセットアップしてスタート。バックで流れるテープに合わせ、得意のマーチングスタイルのソロ、続いてパーカッションソロ、気持ちはすっかりアフリカン。そしてリチャード・ティーとのユニゾンで〝テイク・ジ・Aトレイン〟。ここからは、もうはっきり言ってあの往年のSTUFFを彷彿させる世界。ハイライトのドラムソロも近年ない気合いの入った凄じいソロ！余りに気合いを入れすぎて二度程ミスもあったがそれにしても、本当に凄かった。

？年前に初めてSTUFFで見た時以上に興奮した。いや一良かった、涙ものでした。ガッドさんもまだまだ眉間に皺をよせた鋭い目つきで頑張ってほしい。本当良かった。

10月30日、昭和女子大人見記念講堂

(by. T. Ichii)

NEW VIDEO 紹介

○THE ENERGY OF DRUMMING

そうる　透

これからドラムを始める人達に強力な味方があらわれた。それは我らがそうる透氏が出したビデオ〝ジ・エナジー・オブ・ドラミング〟だ。とにかくここまで中身の濃いビデオは今までなかった。サービス精神旺盛な性格あふれるビデオでよくもここまでと思う程、かゆい所に手が届いたゴキゲンなビデオだ。内容は……？これは買ってからのお楽しみ！

60分　¥13,000

○THE GADD GANG LIVE

出た出た月が、いや月じゃなくてガッドさんのバンド。そうそう、あれあれ、ガッド・ギャングのライヴビデオが出たんですョ！ガッドさんがいて、あっリチャード・ティーもいる!!えっ！ギターがコーネル・デュプリーだって！ベースは、ヒゲを剃ったエディ・ゴメスじゃないですか。それにあのバリトンは、ロニー・キューバーですね―。わあっ！出ましたリチャード・ティーとガッドさんの宿命のバトル合戦。こっ、これはもうはっきり言ってS○○○F。以外の何ものでもありません。まさしく感動の渦、涙ものであります!!

60分　V.B　¥8,000

JPC&DC―さよなら1988―ビッグフェスティバル

Drum City

SONORフェスティバル　開催
12.11.(SUN) スタート!!

JPC

Keyboardフェスティバル　開催
12.10.(SAT)→12.25(SUN)

←←新入荷　新製品ご紹介←←

1．PREMIER（UK）

あのプレミアのドラムセットがバージョンアップされました！

プレミアのドラムセットには、リゾネイター、プロジェクター、APK（Advanced Power Kit）の３つのシリーズがあります。これら全シリーズがバーションアップされたわけですが、まずリゾネイターシリーズ。シェルの鳴りを究極まで追求した結果、世界唯一の二重シェル構造を持ち、元祖ハイ・テンション・ラグを装着したプレミアの代表機種だというのはもう御存知ですね。完成されてる機構なのでこれ以上バーションアップする必要はありませんが、要望の多かったツイステッド・ピンクがフィニッシュに加わりました。そう、ツィステッド・シスターズ等で活躍しているジョー・フランコのカスタム・カラーだったイチゴミルクを思わせるピンクです。レディス・バンドなんかにはもってこいのカラーですね。

続いてプロジェクターシリーズ。プレミアの中堅機種として、またそのパンチのあるサウンドで人気の同シリーズのドラムのラグがリゾネイターシリーズと同じハイ・テンション・ラグになりました。又、やや安定性に問題のあったバス・ドラム・スパーがぐっとふんばる太めのストレートに変身。これで心置きなくパワープレイに突入できますね。

プロジェクター・シリーズ

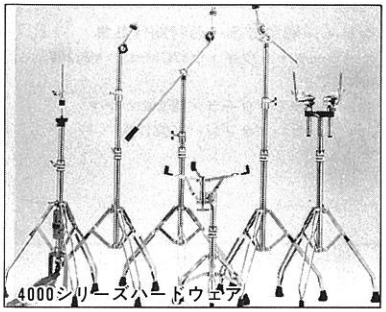
さて、APKシリーズ。従来はAPKがラッカー・フィニッシュの『エクセル』とカバーリングの『セレクト』に分かれており価格も違ったため、やや粉らわしい部分がありましたが、今回からシリーズ名がAPK/XPKとなり、APKがカバーリング、XPKがラッカー・フィニッシュになりました。実はこのAPKというシリーズ、イギリスの音楽誌『Making Music Magazine』の読者投票で『Drum Kit of The Year』に輝いているベスト・セラーなのです。イギリスの若人はAPKのファンなのダ。何といってとも安い！APKのセットがタムタム12″、13″、フロアタム16″、バスドラム22″、スネアドラム14″×6½″、ハードウエア＋ペダル一式で¥220,000、XPKが同様一式で¥295,000。プレミアは高いと思っているあなた！手が届くでしょう。さて、このAPK/XPK、シリーズ名を変更するなんてみみっちい真似は女王様が許しません。まずラグ。なんとプロジェクター・シリーズと同様リゾネイター・シリーズと同じハイ・テンション・ラグを採用。う～んプレミアさん、太っ腹。また、バス・ドラム・スパーもプロジェクターと同じストレートの脚に変身。更に更に、APKにセット

XPKシリーズ

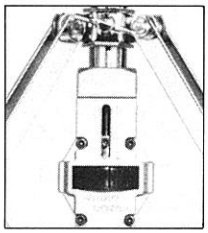
されているスネアドラム#1006のスイッチが上級機種と同じスロー・オフにグレードアップ（ちなみにXPKは#1036）。そして『ミュージシャンにはステージ映えも必要だ！』とバス・ドラム・フープは全品精悍なジェット・ブラック仕上げ。タム類の内面は全て艶消しブラック。ハードなイメージで迫ります。又、APK/XPKにセットされているスネアドラム#1006と#1036両方に今回からリングミュートが付属になりました。

さて、APKとXPKにフィニッシュで区別をつけただけでは芸がない。なんと、あのB.S.（ブラック・シャドウ）フィニッシュがXPKに登場。プレミアさん、これホント値段安すぎるんじゃない？

最後にハード・ウェア。今回ハードウェアは従来のシリーズを大幅に変更して#3000、#4000の２つのシリーズになりました。#4000は従来のプロ・ロック・シリーズの改良版。#3000は、トライスター・シリーズの改良版。両シリーズとも特にセッティングの安定性を重視した作りになっているうえ、ハイハットスタンドにスプリングテンションが一目でわかるゲージが付きました。人気のフットペダル#251は、#254にバージョン・アップ。年明け早々には入荷する予定。

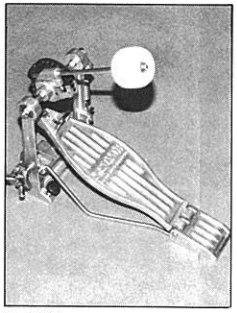

4000シリーズハードウェア

HHスタンドのゲージ



2．SONOR（W. Germany）

従来のソナー・バス・ドラム・ペダルHLZ-5380、Z-5370の流れを引くニュー・アイテムZ-9390登場。既に前号でご紹介したプロテックシリーズ（ハードウェア）のペダルでアルミダイカスト製。軽量ながらしっかりした作りは、流石（オッと、また出タ）ソナー。主な特徴は、チェーン・ドライブでスプリング・カムが５ヶ所で固定でき、スプリング内にノイズ防止のスポンジがはめ込まれているなど、ペダルに対する現在のニーズによく応えています。また、コスト・ダウンをはかるため、全体の構造は、かなりシンプルにまとめられています。写真で見えるペダル左側の蝶ネジは、ペダルをフープに固定させるネジ。トウ・ストップは脱着可能です。


Z-9390

Z-9390　¥35,000

3．JUST ACCOMPANIMENTS Vol.1&Vol.2（USA）

これはひらたく言っても堅く言ってもカラオケカセットテープです。さて、何のカラオケテープでしょう？この会報は内容が太鼓のことばっかなんで、決して演歌のじゃあないってことは皆さんにわかりますよネ？これはですネ、音大生なら泣いて喜ぶ（？）かどうかわかりませんが、ソロ曲の伴奏テープなんです。ピアノ伴奏のみが入ってるんです。これだけ聞いてるの実に不思議ですが、夜、家で或いは電車の中で譜読みをする時とっても便利です。

Vol. 1　『Concert for Percussion—Darius Milhaud』
『Five New Ragtime Solos—Harry Breuer』
『Concert for Marimba—Paul Creston』
—３曲入　¥2,100—

Vol. 2　『Concert pour Marimba—Darius Milhaud』
『Concert for Marimba—Robert Kurka』
—２曲入　¥2,100—

ピアニスト：Edmund Niemann
Susan Anderson

Concert

ジョン・ハッセル&ファラフィナコンサート

前号『コンサート案内』でお知らせしたこのコンサート。行った人は知ってます。とってもエキサイティングでした。ジョン・ハッセルは置いといて、ファラフィナは西アフリカにあるブルキナ・ファソという国の謂ばパーカッション&ダンスグループ。'85にモントルー・ジャズ・フェスティバルに参加出演し、大人気を得ました。8人編成でそのうち3人はダンスも踊り、1人は笛も吹きます。前号で紹介した『Jazz House Piga Piga』でのロック・グループとは対象的で、ファラフィナのリーダーでもあり主宰でもあるマハマ・コナテ氏は、頑ななまでに『アフリカ』を守っています。ただ古いものを継承するのではなく、伝統の中に新たな息吹を与えて『新たなる伝統』としているのです。

ラ・フォーレミュージアムのステージで、ジャンベ、トーキング・ドラム、バラフォン2台、バラ2台、シェケレ、笛と8人がエネルギッシュに叩き、歌い踊るのを観ていると、ひとりでに体が動いてしまって、気付くと何と、外人（欧米人）のお客さん達があちこちで立ち上って踊っている。へぇぇと思ってるうちにゾクゾクっとして来ておやおやっと思ってるうちに体が熱くなって思わずわぁぁっと叫ぶというか歌いたくなるコンサートでした。

因みにラ・フォーレ以外の場所でファラフィナだけのコンサートがあり、夜9時過ぎにスタートして終ったのが深夜1時をまわっていたそうです。

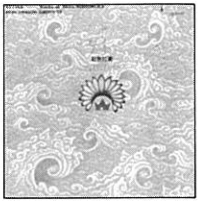
レコード紹介：〝FARAFINA LIVE AT MONTREUX JAZZ FESTIVAL '85〟（Artways）

参考資料：コンサートプログラムより

◀JPCだより▶

■パーカッショングループ'72　CD新発売

去る11月1日銀座中央区民会館で久し振りにコンサートを開いたパーカッショングループ'72。コンサートは大盛況だったが、コンサートを聴けなかった人のために、10月末に発売されたCDをご紹介。



ケチャ…彩色打楽…西村朗作品集
カメラータ・トウキョウ32CM-89　¥3,200

曲目：ケチャ／ターラ／瞑想のパドマ
レゴン／ティンパニ協奏曲

■会費納入のお願い

昭和63年分会費未納の方は、至急同封の振込用紙にて納入ください。行き違いご入金済みの場合はご容赦ください。

■年末年始営業のお知らせ

～12月29日　平常通り営業
12月30日～1月2日　年末年始休業
1月3日～1月4日　12：00—18：00
1月5日～平常通り営業

■お詫び

前号◀JPCだより▶にて『'88打楽器価格表無料引換券を同封いたしました』とありますが、印刷が間に合わず、券を同封しないまま会報を発送いたしました。皆様にご迷惑をかけました事、深くお詫び申し上げます。改めて本号に同封いたしますので、ご希望の方はご持参ください。尚、郵送の場合は、350円切手を同封のうえお申し込みください。

編集後記

わずか1ヶ月と半分のうちに再びこのような会報を出すことになろうとは……私は知ってましたが皆さんは知ってましたか？はっはっはっ。知るわきゃないですね。このくらいのペースで発行できればイインですけれどね。

風の無い穏やかな日が続くと、日毎に冷気が増して行くのがわかります。特に10月がそうでした。おっ今夜は昨晩よりちっと冷たいぞってね。ああこれが10月なんだーなんて勝手に決めとりました。ブラッドベリが「10月の旅人」というSFファンタジーを書いていた10月。極東日本ではいつからか10月11月はコンサートラッシュと決まってます。今年は流行に乗って10月沢山コンサートに行きました。良いコンサートばかりでしたが中でもスティングと藍川由美のコンサートは感動すら覚えたのでありました。スティングは良い！細いことやここまできたプロセスなんてわからないけど、サイコー！（一昔前の言葉でしびれる！）。藍川由美さんは知る人ぞ知るのソプラノ歌手で、打てば鳴るまではないけれど、その透明な歌声は空気を通して、体を通して、胸を打つのです。ジャンルは両極的な組み合わせですけど、肌にぞぞっと粟だつものがあるんです。どっちにも。11月、12月とまた沢山コンサートがあります。時間とお金が許す限り行ってみるつもりですが、どんなもんでしょうねぇ。楽しみです。

コンサートと字が似てるけどちょっと違うのがコンクール。全国目指して、金賞目指して日夜努力を重ねて結果を待った人、下手でも良いから聴いている人に感動してもらいたいと願いながら日夜努力を重ね満足した人、色々いるでしょう。個人的には後者の方が良いと思いますが前者の傾向の方がどうも多いようです。吹奏楽ばかりでなく何でもそうみたい。最近のアンコン（アンサンブルコンテスト）にも疑問を感じますね。打楽器ではない審査員が打楽器を審査する。そうするとどうしてもメロディラインのあるものに偏ってしまう…。キーボードのない曲は敬遠される、曲の範囲が狭められてきて皆同じような曲を演奏しだす……。アンコンが始まった頭初はもっと期待してたんです。アンサンブルが若い人達に広まるのはイーことだって。でもでも、どっか違ってしまってるような気がします。譜面が真っ黒だから難しいってわけじゃないんだけど。いやいや、どーも最近季節のせいか、はたまた齢のせいかどーもグチっぽくてねェ…。ほんじゃ皆さん良いお年を！

—M—

表紙　青山純

昭和63年11月25日発行
発行所　J・P・C事務局
〒111　東京都台東区西浅草一—七—一
郵便振替口座　東京九—一五三一一五
電話〇三—八四五—三〇四一(代)
加入者　㈱コマキ楽器